

国民健康保険事業費納付金等の算定に係る協議経過について

1 前回運営協議会後の協議経過（概要）

平成 30 年 11 月 16 日に開催した前回の岩手県国民健康保険運営協議会で示した論点等を中心に、平成 31 年度の国民健康保険事業費納付金等の算定に係る方針（特に、激変緩和措置に関する方針）について、引き続き市町村と協議を行った。

<協議経過>

11 月 19 日 ～11 月 21 日	市町村に対し文書で意見照会① 〔・前回運営協議会で示した論点に対する意見について〕
11 月 27 日	岩手県国民健康保険連携会議 〔・上記意見照会の結果を踏まえ、最も現実的な 2 案に絞り、市町村と協議。 ・再度、全市町村に文書で意見照会を行った上で、県において次回運営協議会に諮る方針案を決定することとした。〕
11 月 27 日 ～11 月 29 日	市町村に対し文書で意見照会② 〔・連携会議で示した対応案に対する意見について〕

2 市町村への意見照会①

（1）激変緩和措置にかかる論点

前回運営協議会で審議した論点に対する意見を市町村に照会した。

前回運営協議会では、試算の結果、①今後 5 年間、財政安定化基金を均等に活用すること（財源：約 3 億 8 千万円）を基本とした場合、「一定割合」を 7 % まで引き上げる必要があること、②基金を平成 31 年度の単年度で全額取り崩した場合（財源：約 5 億 8 千万円）であっても、「一定割合」は 4 % まで引き上げる必要があることを踏まえ、次の論点を示したところ。

【論点 1】

- 激変緩和措置として、「一定割合」をどの程度まで引き上げられるか。
 - ・ 激変緩和財源の範囲内で設定する必要がある。
 - ・ 一方で、医療給付費の伸び率が 3 % 程度であるのに対し、標準保険料率については 4 ～ 7 % まで増加することとなる。保険税額の急激な上昇につながるおそれもあり、被保険者等からの理解が得られるか。
- 財政安定化基金は、どの程度、取り崩すべきか。
 - ・ 平成 35 年度まで活用すべき財源であり、今後 5 年間を見据えた上で、取り崩す額について検討すべき。

また、平成 31 年度における納付金等の算定結果（仮係数）によると、起点年度（平成 28 年度）と比較した 1 人当たり保険税について、最大の市町村と最小の市町村の増減率の差は、平成 30 年度算定よりも拡大していることを踏まえ、さらに次の論点を示し、「下限設定」の導入の可否について意見を照会したところ。

【論点2】

- 今後、3年ごとに予定されている運営方針の見直し等に向けて、将来的な保険税統一など、そのあり方について議論を進めていくに当たり、**新しい国保制度の仕組みの導入**によって市町村間の格差が拡大する状況にあるのであれば、格差の拡大を抑制する対策が必要ではないか。
- 激変緩和財源が活用できる期間は平成35年度までとなっているが、平成36年度以降においても引き続き、市町村間格差是正等の調整措置を講ずるためには、**激変緩和財源のみに頼らない財政調整の仕組みの導入**について検討する必要があるのではないか。
- ただし、平成30年度は下限設定を行っていないことから、**今後の下限設定の導入**についての検討に当たっては、市町村の実態や意見等に配慮する必要がある。

(2) 市町村からの意見

ア 「一定割合」について

- 「激変緩和措置の趣旨を踏まえ、財源不足が生じない程度に、一定割合を段階的に引き上げていくべき」、「医療費の伸びによる自然増分を加味すべき」との意見が多かった。

イ 財政安定化基金について

- 財政安定化基金（激変緩和分）は、激変緩和措置期間である平成35年度までの間、基金不足が生じないよう、安易に取り崩さず、計画的に活用すべきとの意見が多かった。

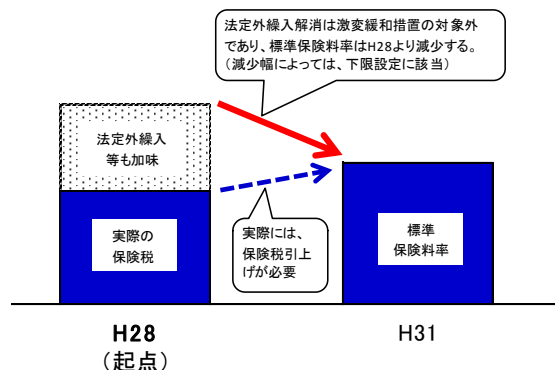
ウ 「下限設定」について

- 前回運営協議会資料の試算により下限設定の該当となる市町村は、一般会計からの法定外繰入を実施するなど財政的に厳しい市町村が大半を占めている実態にあり、このような市町村からは、「一律の下限設定に伴い大幅な負担増を求められた場合、保険税の急激な引上げや法定外繰入等の増加を招く懸念がある」、「赤字削減・解消計画に基づく取組の支障となる」等の理由で、**導入に反対する意見が多かった**。

<参考> 財政的に厳しい市町村が、「下限設定」の該当となる場合がある理由

保険税の増加抑制等のため一般会計からの法定外繰入を行っている市町村において、**実際には、法定外繰入の解消のため保険税の引上げが必要な状況にあっても、激変緩和措置においては、法定外繰入を行っていない市町村との公平性の観点から、「法定外繰入の解消」を原因とした保険税額の変化については激変緩和措置の対象外とされる。**

そのため、比較の起点となる平成28年度保険税額には法定外繰入等も加算することとされており、これによって、平成31年度の標準保険料率が平成28年度より減少し、減少幅によっては、下限設定に該当する場合がある。



- また、下限設定の導入は、将来的な保険税統一の方向性等と合わせて議論されるべきであるが、議論がまだ十分にされていない現段階では導入は慎重であるべきとの意見も多かった。
- 一方で、将来的な国保税水準の統一化も見据えて、市町村間格差是正に対応するための財政調整機能として導入を検討すべきとの意見もあった。

(3) 意見を踏まえた対応

ア 財政安定化基金について

激変緩和措置期間（平成 30 年度～平成 35 年度）の間、計画的に活用すべき財源であり、期間内に基金不足が生じないように、残り期間内で均等に取り崩すことを基本とする。

イ 「下限設定」について

財政的に厳しいにも関わらず下限設定の該当となる市町村における保険税の急激な引上げや法定外繰入等の増加等の悪影響への懸念を考慮し、現時点では下限設定の導入を行わないこととする。

今後、国民健康保険運営方針の見直しのタイミングで、市町村間の格差是正の観点から、下限設定も含めた財政調整機能のあり方について議論していくこととする。

3 国民健康保険連携会議での協議

2 の対応を踏まえ、①基金は均等に取り崩すこと、②「下限設定」を導入しないことを前提に、最も現実的な次の 2 案に絞り込み、国民健康保険連携会議において市町村と協議を行った。

【案 1】

激変緩和財源を、国の公費及び財政安定化基金のみとする。（一定割合＝7%）

⇒【論点】

- ・平成 30 年度に活用した財源にのみ着目した対応。
- ・保険給付費の伸び率の倍以上の増加幅となり、激変が懸念される。

【案 2】

激変緩和財源に、国の公費、財政安定化基金のほか、新たに県繰入金の一部を含める。

（一定割合＝4.34%程度）

⇒【論点】

- ・新たな財源（県繰入金）を充当。
 - ※ 国民健康保険運営方針では、特例基金及び国調整交付金とともに激変緩和財源とされているものであるが、平成 30 年度には活用しなかったもの。
 - ※ 県繰入金の一部を激変緩和措置対象市町村に重点配分し、当該市町村の納付金額を減額するもの。
- ・一定のルール（自然増分＋ α ）の設定により、緩やかに割合を上げていくもの。

連携会議においては、双方の案それぞれに対し、支持・反対の意見が出されたところであり、会議の場では結論を出さず、再度、全市町村に文書で意見照会を行った上で、県において次回運営協議会に諮る方針案を決定することとした。

4 市町村への意見照会②

連携会議で示した2つの対応案に対する意見を市町村に照会した。

【案1】への支持は、主に激変緩和措置の対象外となる市町村から寄せられており、【案2】の採用により納付金等の負担の増加を懸念するなどの意見が主なものである。

<主な意見>

- 県繰入金の一部を財源に含めることは、下限設定の考え方を、激変緩和措置対象外の全市町村に浅く広げただけであり、結局、激変緩和措置対象外の市町村に負担を強いることになるのではないかな。
- 財源確保のために、激変緩和措置対象外の市町村において納付金上昇などの負担を強いられるのであれば、納得できない。激変緩和措置は、激変緩和財源内で対応すべき。

一方、【案2】への支持は、激変緩和措置対象の如何を問わず寄せられており、激変の回避、長期的視点での激変緩和措置のルール化、財政調整機能の確保など、様々な観点からの意見が寄せられた。

<主な意見>

- 新たな国保制度は、全県で支え合う仕組みであることから、共同保険者である全市町村が協力し合い、なるべく緩やかな激変緩和措置となるように取り組むべき。
- 国保財政の安定的運営の観点から、より長期的な激変緩和の方針(可能なら35年度まで)を示してほしい。
- 財源のみを根拠に一定割合を設定する【案1】では、次年度以降も、算定結果や財源によって設定する割合が増減することとなり、年度間の対応に不均衡が生ずる。「自然増分+ α 」という算定基準を設ける【案2】の方が理解を得やすいと考える。
- 年々減少する国からの激変緩和措置財源のみで対応していくことは、財政調整機能としては非常に弱いものであり、激変緩和措置が終了する平成36年度以降も市町村間の財政調整機能を維持していくためには、激変緩和措置財源以外の仕組みを導入しておく必要があると考える。

5 方針(案)について

以上の意見等を総合的に勘案した結果、県としては、【案1】を支持する意見等にも配慮しながら、【案2】の考え方を基本とした方針としたいと考えている。

方針(案)は、資料2のとおりである。